

大浦未来学を通じた児童の発信や行動が住民を動かし地域に浸透

## 環境大臣賞 京都府 舞鶴市立大浦小学校

青い海と白浜を背景に、静かな漁村や農村が点在する大浦半島。若狭湾国立公園に指定され、その半島一帯を校区に持つ同校では、恵まれた環境を舞台に多様な活動を行っている。昔から取り組んでいるのが、住民と協力しながら漂着したペットボトルやプラスチック類を回収する「クリーン作戦」。近年は、大量の漂着ごみに加え、マイクロプラスチックも目立つようになり、地場産業である漁業に悪影響を及ぼすようになってきた。

それがきっかけの一つとなり、同校では「大浦未来学」と名付けて、持続可能な社会づくりを目指す体験学習を取り入れている。マイクロプラスチック回収では、半島の北部にある野原地区の海岸に出向き、大学や観光協会の指導を得ながら実施。回収したマイクロプラスチックの一つひとつは、5ミリに満たないサイズだが、集まるとカラフルでビーズのように美しい。その特徴を生かして、児童は、アクセサリやピンバッジなどを作成し、啓発活動を行っている。野原観光協会 環境部会長の川淵清一さんは、「いつかマイクロフリーの浜辺になることを願いながら、みんなで取り組んでいます」と期待を込める。

また、学校近くの海岸周辺では、漂着ごみやポイ捨てなどのペットボトルの散乱が問題になっている。漁師が苦慮しているのを知った児童は、回収に励む。さらに、多くの人に現状を知って欲しいという思いから、ペットボトルなどで楽器を作って表現する取り組みにも挑戦。完成した楽器は、「未来学コンサート」で披露し、多くの住民の前で、演奏会を実施した。ごみが楽器になることに驚いた観客からは、感動のコメントが寄せられるなど、児童の積極的な発信は、ごみへの意識改革に直結。そうした過程で、プラスチックのことを詳しく学んだ児童は、酢と牛乳で生分解性プラスチックを作って、いろんな実証実験を行っている。そのために必要な資金は、アルミ缶回収の収益金でまかなった。自分たちでチラシや動画を作成し、地域に広く呼びかけて、多くの住民の協力が得られた結果だ。

3年前にスタートした大浦未来学を通じた児童の発信や行動は、着実に住民の心を動かし地域に浸透、協力の輪が広がっている。



### 京都府 舞鶴市立大浦（おおうら）小学校

学校長：中川 靖彦（なかがわ やすひこ）

児童数：49名(2023年11月末現在)

住所：京都府舞鶴市字平 1583 番地

電話：0773-68-0002

アクセス：JR「東舞鶴駅」から車で約15分

上左：学校周辺の海岸でポイ捨てごみを回収する児童、上右：砂浜に紛れるマイクロプラスチックを回収、2左：回収した漂着ごみやポイ捨てごみを分類調査、2右：マイクロプラスチックで作成したピンバッジ「#OURA（オオウラ）」、3：酢と牛乳で生分解性プラスチックを作成、下：漂着ごみで作った楽器で演奏会を開催